

(政務活動費用)

(様式1)

出張報告書

平成29年11月30日

釧路市議会議長 渡辺 慶藏 様

会派名 自民クラブ

代表者名 草島 守之



次のとおり、政務活動費による出張を終えましたので報告します。

受命者	三木 均
出張先	沖縄県沖縄市
期間	平成29年11月8日 ~ 平成29年11月11日(4日間)
用務	「第79回 全国都市問題会議 ひとつながり都市の魅力と地域の創生戦略 新しい風をつかむまち」 参加
調査(研修)結果等の概要	別紙報告書の通り
備考	

注) 1 資料等がある場合、添付すること。資料は、事務局経由で会派へ返却するので、本出張報告書(原本)とともに会派で保管すること。

2 調査結果等の概要は、別紙による記載も認める。

第79回 全国都市問題会議

ひとつがなぐ都市の魅力と地域の創生戦略
新しい風をつかむまち

参加者 三木 均

日時 平成29年11月9日から10日

場所 那覇市県立武道館



議題解説

本格的な超高齢化・人口減少社会が到来する中で、全国の都市において人の動きの活発化しているが、その動機や目的（価値観）の多様化といった“新しい風”をつかみ、都市をさらに発展させていくことが求められている。以下、“都市の魅力”、“ひとつがなぐ”、“地域の創生”という3つのキーワードからテーマの議論を進める

初めに都市の魅力とは何か。都市とは人が集う場であり、日常の経済需要を“市場”を通じて満たす場、人々の生活を求める諸機能の集積した場であることから、その“魅力”、“人を引きつける力”とは諸機能集積という事で育まれる多様性であり、各都市はこれらの利益を享受することで発展して来た。これらの機能はさらに“経済的”、“生活的”、“文化的”、“社会的”な4つの魅力とさらに来訪者と住民という2つの視点から見る事ができる。

来訪者と住民の視点から“都市の魅力”として言えることは、人々の価値観が多様化する中で複合的な魅力の創出が鍵となる。例えば、エコツーリズムやグリーンツーリズムなど単に“観る”だけではなく、地域住民との“交流”を通じた“体験”などである。両者の魅力は相互に重なり合い、さらに魅力を深めていく。これがまさに都市の魅力づくりであり、本会議のテーマ“ひとつがなぐ”につながる。

更に、都市の多様な魅力は多様な主体によって形成されるネットワーク（例えば、高岡市の「文化創造都市高岡プロジェクト、全国の自治体で進められている「地域包

括ケアシステム」など」の中で進められる協働によって創り出される。

次に、“地域の創生”という点であるが、狭義では、住民に身近なサービスを住民により近い組織で行う住民参加・協働で進める“都市内分権”のようなものと広義では中野区が常陸太田市、館山市、喜多方市、みなかみ町と体験・観光交流や経済交流を行う“なかの里・まち連携事業”のような遠隔型の連携などを重層的に組み合わせ、また複数の分野にまたがる政策展開、分野横断型の行政体制、住民の参加・協働をふくめ、地域資源を有効に組み合わせ、新たな価値を生み出していくことが求められる。

地方自治体の役割は、従って多様な住民や団体、企業等が主体的にまちづくりに関わることのできる仕組みを整備し、住民とつなげていく地域のコーディネート機能を果たすことである。

”都市の魅力“、“ひとをつなぐ“、“地方の創成“の含意やそれに関わる多様な視点を念頭に”新しい風をつかまえるまちづくり“について議論を深めるべきである。

[基調講演]

多様性のある江戸時代の都市

東京大学史料編纂所教授 山本 博文

江戸時代の各地方・町の特徴は、江戸に象徴される都市の強大化に対する城下町、宿場町、門前町、港町など多様なまちの発展である。参勤交代で街道が整備され宿場町や門前町が栄え、人や品物の流通が進み商業、経済、観光などの繁栄をもたらした。まさに参勤交代の制度が全国各地の特徴ある発展をもたらし、豊で均質な地方文化を創り出したと言える。

しかし、幕末この制度が廃止され、明治期以降中央集権国家の形成と近代化の流れの中で、豊かな地方の均質性が失われ都市と地方の格差が生まれ大きくなり現在に至っている。

最近の流れとして、江戸期に培われた城下町や門前町などを再興し地域振興を目指そうとする動きが全国的に活発になりつつある。現在それぞれ豊かで均質な地方の再生に向け、嘗ての参勤交代の制度が思わぬ形で寄与している。

[主報告]

“ひと つなぐ まち” —新しい風をつかむまち—

沖縄県那覇市長 城間 幹子

那覇市は、沖縄本島の南西部海岸に位置し、古くから東南アジアの各都市を結ぶ交通の要衝地点として発達してきた歴史を踏まえ、「ひととひととのつながり」をキーワードとしてまちづくりを進めている。

取組みとしては、①観光客も地元市民も楽しめるまちの創造として、第一牧志公設市場の建替え、農連市場地区の再開発、新文化芸術発信拠点施設の建設を進め、沖縄の文化や特産を生かした中での交流を進めている。②子どもの貧困対策や健康寿命の

延伸、LGBT などマイノリティの尊重などを含め、子育て・福祉など幅広い分野で小学校区やそれぞれの分野を単位としてボランティア活動を進め、そのために新たな地域リーダーの発掘・養成を行い、行政と民間が一体となったまちづくりを進めている。

こうした取組みを新たな礎とし、ますます魅力ある「ひと つなぐ まち」の創造に取り組んでいる。

[一般報告及びパネルディスカッション]

一般報告としては、山下祐介（首都大学大学院人文科学研究科准教授）氏が「人口減少社会の実像と都市自治体の役割ー人口とインフラの適正な持続的配置は可能か?」、蝦名大也（釧路市長）氏が「自然と都市が融合し共生が地域の価値を高めるまちづくり」、下地芳郎（琉球大学観光産業学部長・教授）氏が「新たなステージに入った沖縄観光ー複合的な魅力を有するハイブリットリゾートへ」というテーマでそれぞれ講演を行った。

また、パネルディスカッションでは、後藤晴彦（早稲田大学理工学術院教授）が「ひとがつなぐ都市の魅力と地域の創成戦略ー新しい風をつかむまちづくり」、能作克治（株式会社能作代表取締役 本日は代理）が「産業観光による地方創生」、藤田とし子（まちとひと感動デザイン研究所所長）氏が「人と人がつながり、共感で響き合うーまちの魅力と新たな地域価値の創造」、平田大一（沖縄文化芸術振興アドバイザー）氏が「感動立県おきなわ！をめざしてー感性・文化産業と沖縄感動産業戦略構築への道」、山岸正裕（福井県勝山市市長）氏が「ふるさとルネッサンスー16年の軌跡」、染谷絹代（静岡県島田市市長）氏が「人を育て・人が育つまちづくりー協働・連携の中で」というそれぞれのテーマで活動報告を行い、「ひとがつなぐ都市の魅力と地域の創生戦略」について意見を述べた。

全体としては、今あるもの、即ち歴史的、文化的、地理的などその地域の成立要件、特徴、強みをもう一度見直し、そこからひとづくりとまちづくりの在り方を考えるというものであり、これを起点にそれぞれの方向性をもってひとやもの交流を最大限に引き延ばすことが今日のまちづくりに求められている。具体的な事例は今回の会議でも非常に豊富で示唆的であったが、釧路市にあってもまちづくりの情熱ほどのまちにも負けないので、もう一度わがまちとひとを今までとは違った角度や次元で見直しを図らなければならないのではなか、そしてその謂わばパラダイム転換こそが非常に重要であるように思われる。